

「遊塾」が始まる

松岡正剛

「私塾のようなものをつくってみてはどうか」という中上千里夫の勧めは、工作舎が池袋の八畳ほどの木造事務所にあった頃から、つまり工作舎が誕生した一九七一年から続いていた。六年も七年もその勧めから逃げていた理由は簡単ながら二ツある。僕自身の中にプログラムができていないということがひとつ、もうひとつは工作舎そのものもともと柔組織的な塾のようでもあり、ワークショップのようでもあり、またアシラムのようでもあったからだ。「工作舎を充実できないで他の力が発揮できるはずはない」と、僕はおもいつづけてきた。

それでも二、三年前から少しずつ「存在と精神と技術の充実」のための何らかのオペレーションが工作舎の枠を越えて発揚されなければならぬという気持ちが湧いてきた。「閉じた工作舎」を想定して、その内側に何かを詰めこもうとしてもつねにはころびが生まれてしまうからだ。内外の境界線をゆるい因果律によって両界化するようなプログラムに取組むべき日が迫っているとおもわれた。

甚だ悠長な計画ではあったが、僕はまず出版物による「内外の微塵」を試みることに着手することにした。それが「遊」9・10号の特別企画「存在と精神の系譜」と、単行本「スーパーレイ1009」である。「遊」9・10号では、僕がビタゴラスからマンディアルグに至る一四二人の思想と僕自身の自己史をよりあわせて一〇〇枚近い原稿を綴り、これに四〇名近い内外のスタッフが解説を加えるというエディトリアル・スタイルを採ってみた。「スーパーレイ1009」は、これからの世紀には「女性の観音力」こそが必要であるとの判断から、百名を超える工作舎内外の女性陣による「女のカタログ」づくりを取組



木遊塾メンバー

んでもらった。前者で「男組」を、後者で「女組」を完了しておきたかったからでもあった。次はもう「存在」でよい。計画の第二段階は「遊」の第二期をスタートさせ、そこに工作舎の此岸と彼岸を近似視するディテールを埋めこんでみることだった。そのため第二期の冒頭を「相似律」という特集で組んだ。「遊線放送局」や「ローカス・フォーカス」欄の設置もささやかなサブ・セットのひとつである。この「遊」第二期とともに隔週土曜日の工作舎フリー・スペースを読者に開放する計画を実施した。これは「フリー・トーク・デイ★遊学する土曜日」として、一九七八年の一月から十二月まで隔週土曜日に実行された。森永純、荒俣宏、山野浩一をはじめとする多くのゲストを招きつつ、僕は一年間しやべり続けた。それなりに壮絶な体験であったが、これはいま「プラネタリー・ブックス」というシリーズになって少しずつ活字化されつつある。

第三段階は、「遊」や単行本によるエディトリアル・オーケストレーションを「場所」へ転移させてみることにあった。大阪、札幌、松本などで開いた「遊撃展」、水戸、京都、金沢、富山、名古屋、広島、博多、熊本その他で開いた中派の参加が大きな威力を発揮した。昨年後半からはさらに坪井繁幸が共振り、同志社大学、武蔵野美大をはじめとする「大学遊会」も始まった。このような時空交差するエディションを強化し、活動を海外にまで延展させるために、昨年十月より木幡和枝が工作舎の外へ出ている。

以上のようなステップを背景に、僕は僕なりに「遊塾」の構想をまとめはじめたのだが、それでも踏み切れない事情の中だった。それが、今年になって一挙に決意するに至ったのは、主に三つの作用因による。

第一には、工作舎の舎内活動のリーダーが高橋秀元、十川治

江、佐々木涉の三者にそれぞれ委ねられ、その成果が急速に実りはじめたことである。とりわけ十川治江がアシラム・カノンのごとくに大車輪化したことに僕は「新段階の到来」を感応した。

第二には、昨年からは始めた「遊塾」の志願者が急増してきて、舎内スタッフと遊塾との境目があやしくなり、そのわりにはその人たちが各プロジェクトを導引するメンバーに不足をきたしはじめたということがある。一人一人の實力が問われたということでもある。力のあるディレクターがごっそり待望されることとなった。そういう人たちは街をさがしてもいなかった。第三には、これこそ僕をして決定的に踏み切らせた引き金となったのだが、中上千里夫が「遊塾は無料にしてもいい」と言い切ったことである。僕はもともと「教える」教えられる関係」というものに金銭がつきまとうことに嫌悪感をもっていた。「教育」という言葉さえいまわしくおもって来た。しかし、ワークショップであれ、アシラムであれ、その場所の確保、テキストや資料の調達、ゲストへの謝礼などを考えれば、誰れもが費用の問題で二の足を踏む。それに、存在が存在にもたらす何かを適切に決定づける「代金」などというものもうまくおもいつけなかった。中上千里夫の英断は、こうした僕の遠慮を喝破して余りあるものだった。僕ははい、よ乗り出すことにした。

2

「覚悟する者のみ、その存在を募集」というスローガンによって「遊塾」づくりの第一歩が開始された。しかし、いろいろ迷っていたために応募要領が出来あがったのが二月中旬になってしまい、そのため、すでに「遊読者カード」を通じて申し込んできた人への応募要領の発送が終ったのが二月下旬、「遊」誌上で応募要領が発表されたものを読者が書店で見る機会が与えられたのが、やっと三月二十五日あたりという有様だった。第一次面接日が三月三十一日であったから、このような「遊」の発行の遅れ方は、あまりにも読者に対する機会均等を欠くことになった。

そんな事情があったので、応募者はせいぜい三、四〇人であろうとおもっていた。それに僕が応募者に唯一要請する「覚悟」に答えられる人の数はそんなに多数である必要も感じられな



日遊塾メンバー

った。わが實力から言っても、せいぜい二〇人が限度であろうということもあった。ところが応募者の数は三月下旬になるにしたがってまたたくまにふくれあがってしまった。「遊」を読んだ人が次々と応募してきたためである。三月三十一日の第一次面接日にはついに一〇〇人を突破、最終締切日とした四月六日に二二六人、それでもまだ断念しきれない、勇気ある読者がその後も四、五〇人ほど申し込んできた。年齢も十六歳から五十三歳にまで及んでいた。僕は胸が痛くなってしまった。空恐しくさあつた。面接がまた難行苦行であった。一人の存在をたかだか二、三分の面談で裁断しきれぬものではないということもあるし、当方にその資格があるかどうかということもある。しかし、たとえ一年にわたって付き合っても一人の存在をはかりきれぬものではない——と言いきかせ、面接にあたった中上千里夫、高橋秀元、佐々木涉、十川治江、高橋克己、そして僕の六人は意を決して都合三十二時間に及ぶ「緊張」を受けとめることにした。四月八日午後十一時三十分、最後の面接者である星野かづえと十川治江の応答を聞いているうちに、僕は自分でもまったくと予期せぬことながら、熱いものが唐突にこみ上げてくるのを抑えることができなくなっていた。二人のすばらしい応答への感動と、それまでの緊張が体の奥へ消えてゆく実感が一挙に宇宙波のようにやってきたからだろうか。

しかし、入塾決定者のための選定作業はもっと苛酷なもの僕に突きつけた。当初から「多くても二十五人」とおもっていたラインを、応募者の諸君がやすやすと破ってしまったからである。とはいえ、管理力や収容スペースの問題もある。どこかでラインを引かなければならない。またしてもさんざんおもひあぐねた挙句、僕は「遊塾」を「対」にするにおもいついた。当初に予定していた毎週木曜日午後六時から分を「木遊塾」とし、これに毎月第四日曜日午後二時から「ぶつづけ遊塾」を新設して「日遊塾」とした。それでもなお「木遊塾」に三十三人、「日遊塾」には三十一人の多きを決定せざるをえなかった。これはあきらかに臨界値を越えている。覚悟しなればならないのは僕の方だったということだ。それならばそれで僕も覚悟する。誰にもできなかった未来に向って投企する。諸君、ひとつ前代未聞という奴に向って共闘してみようではないか！